Click Here

ボロディン　Borodin ■交響詩「 中央アジアの草原にて 」 この曲は，ロシア５人組の中の１人，ボロディンの代表作です。アレクサンドル２世の即位２５周年祝賀行事のために作られたものです。いわゆる描写音楽というジャンルに属します。 ロシア語のタイトルは音画「 中央アジアにて 」というものですが，西欧での演奏のために訳された時に「 草原 」という語が加えられました。まさに，音による絵のような曲です。中央アジアの草原を行く隊商の姿を鮮やかにエキゾチックに描いています。 ヴァイオリンの高音の弱音の持続音の上に，ノスタルジックなメロディがクラリネットの弱音で演奏されて曲は始まります（ 「のどかなロシアの歌」 ）。続いてエキゾティックなメロディがイングリッシュ・ホルンに出てきます（ 「東方の調べ」 ）。トボトボと歩いているような感じが続きますが，「 のどかなロシアの歌 」がメロディがフォルテで決然と演奏され，隊商がだんだん近づいて来る雰囲気を出します。これまで出てきたメロディがあれこれ美しく絡み合って演奏された後，再度音量が弱まっていき，冒頭と同じような雰囲気になって静かに曲を閉じます。管楽器を中心として，親しみやすいソロが次々と出てきて，絡み合うあたりが聞きどころになるでしょう。(2002/4/2) 音楽 クラシック音楽と聞くと、「 堅苦しそう 」「 何を聴けばいいかわからない 」と敬遠してしまう方も多いのではないでしょうか。実は、そんな方にこそオススメしたい名曲が存在します。それが、アレクサンドル・ボロディンの交響詩『中央アジアの草原にて』。たった7〜8分ほどの短い曲ながら、その中に雄大な草原の風景、異なる民族文化の交流、そして情感豊かな物語が詰まった、まさに「 音の映画 」のような作品です。 本記事では、クラシック初心者でも楽しく読めるよう、ボロディンの人となりから作品の背景、歴史的意義、聴きどころ、名盤紹介、聴き方のコツまで、余すところなく解説します。 まずはこの曲の作曲者、アレクサンドル・ボロディンについて簡単にご紹介しましょう。1833年、ロシアのサンクトペテルブルクに生まれた彼は、なんと音楽だけでなく化学者としても成功した人物。昼は研究室、夜は作曲という生活を送り、生涯にわたって科学と音楽の両方に情熱を注ぎました。 実はボロディン、当時のロシア音楽界で有名だった「 ロシア五人組 」の一人。彼らは西欧クラシックとは異なるロシア独自の民族音楽を取り入れた作曲を目指して活動していました。代表作にはオペラ《イーゴリ公》、交響曲第1〜3番などがありますが、中でも『中央アジアの草原にて』は短く親しみやすく、初めてクラシックに触れる人にもぴったりの作品です。 1880年、ロシア皇帝アレクサンドル2世の即位25周年記念行事のために作曲されたのがこの曲。当時ロシアは中央アジアへの勢力拡大を進めており、その政治的背景を受けて「 ロシアと中央アジアの民族交流 」を音楽で描いたのがこの交響詩です。 本来は「 活人画 」（ 俳優たちが静止して絵画のような情景を再現する舞台演出 ）の伴奏曲として考案されましたが、最終的に純粋なオーケストラ曲として披露されることに。今ではロシア音楽の傑作として世界中で演奏される名曲です。 この曲の最大の特徴は「 音楽による情景描写 」。つまり、言葉を使わず楽器の音色や旋律、リズムだけで情景や物語を描き出すところです。 透明感のある高音で静かな草原の夜明けを表現。音を聴くだけで、朝もやの中に広がる草原の静寂が目に浮かびます。冒頭から物語の世界に導かれます。 ボロディンの真骨頂、どこか懐かしく哀愁漂う旋律。とにかく美しいけど希望も感じられる。これがロシア兵の存在を象徴しており、勇ましくも寂しげな民族の心情を映し出します。 中央アジアのキャラバン（ 隊商 ）を描写する異国風の旋律。装飾音が特徴で、異文化の香りが漂います。 ロシア旋律と東洋旋律が次第に重なり合い、最後には美しいハーモニーを奏でる。この瞬間が「 異文化の平和的共存 」を象徴する感動の場面です。 19世紀のロシア帝国は、東へと勢力を拡大しながら中央アジアの草原地帯へ積極的に進出しました。この地域には多様な民族が暮らし、交易や文化交流が盛んに行われる一方で、領土の拡大を巡る対立や緊張も存在していました。そんな複雑な時代背景の中で作られた『中央アジアの草原にて』は、単なる自然描写の音楽作品にとどまらず、政治的かつ文化的なメッセージを込めた珍しい交響詩です。 曲は、ロシア兵の隊列が中央アジアの商人キャラバンと草原で出会い、それぞれの文化や生活様式を尊重しながら共存して旅を続ける様子を音楽で表現しています。具体的には、クラリネットがロシア兵の行進を象徴し、イングリッシュホルンが東洋のキャラバンの旋律を奏でることで、異なる文化の対比と調和が描かれています。また、ピチカートの馬やラクダの足音、金管楽器とティンパニの盛り上がりは、交流と和解の瞬間を示しています。 このように、『中央アジアの草原にて』は当時のロシア帝国の政治的意図を背景に、音楽を通じて「 異文化理解 」と「 平和共存 」の理想を示した作品であり、単なる風景描写を超えた深いメッセージ性を持っています。ボロディン自身も民族学に関心が深く、この作品を通じて文化の多様性と調和の大切さを訴えたとも言われています。 『中央アジアの草原にて』は約7〜8分の短い交響詩で、中央アジアとロシアの民族音楽が融合したドラマティックな作品です。言葉がわからなくても、音楽だけで自然や情景が鮮やかに浮かび上がるため、初心者でも十分に楽しめます。楽譜が読めなくても、自分の感じたままに「 草原の朝かな 」「 馬の足音が聞こえる 」と自由に想像しながら聴くことで、音楽の世界に入りやすくなります。 この曲は楽器ごとに役割があり、ヴァイオリンの高音は静かな夜明けを、クラリネットはロシア兵の隊列を、イングリッシュホルンはキャラバンを表現しています。ピチカートの弦楽器は馬やラクダの足音を、金管楽器とティンパニの盛り上がりは民族同士の交流を感じさせます。朝の散歩や雨の日の読書、旅行の移動中、夜寝る前など、聴くシチュエーションによって違った雰囲気が楽しめるのも魅力です。さらに、映画やCMのBGMとしても使われているため、映像と合わせて聴くのもおすすめです。 ボロディンの他の代表曲にはオペラ《イーゴリ公》の『だったん人の踊り』があり、民族的なリズムとメロディが印象的です。演奏ではワレリー・ゲルギエフの情景豊かな指揮や、ユージン・オーマンディの聴きやすいスタイル、ネーメ・ヤルヴィの民族色を強調した演奏がおすすめです。 気になった方はYoutube動画をご覧ください。 Mikhail Pletnev conducting Borodin's Symphonic Poem “In the Steppes of Central Asia” さらに、ボロディンは化学者で大学教授でもありながら作曲家としても活躍した人物で、その多彩な背景が音楽の温かさと自然描写に表れています。 『中央アジアの草原にて』は、短時間でクラシックの奥深さ、情景描写の楽しさ、民族音楽の魅力を体感できる名曲。クラシック初心者の方にもおすすめの1曲です。まずはお気に入りの名盤を選んで、気軽に音楽の旅に出かけてみましょう！ 遠近法と経過する時間の存在する音世界　ボロディンの「中央アジアの草原にて」は子供の頃より異国への扉を開けてくれる作品でした(なのに、ずっと忘れてしまっている作品でもあります)「ベルシャの市場にて」や「イーゴリ公」、「シェエラザード」など、それらに聴く東洋の描写は色彩感が強く、且つ力強さや官能、どこか懐かしい情感まであり、そこには民族色の強い暮らしまで垣間見えるように思います。ボロディンは、ロシア5人組の中でも情緒に溢れた旋律を持つと感じている作曲家です。その作品を見渡すだけでも、歌劇から交響曲、室内楽と幅広く*、そのいづれにも民族色と美しい旋律に出会うと感じています。*夜想曲の楽章を持つ「弦楽四重奏曲 第2番」、交響曲 第2番・第3番「未完成」にも灰汁は強いのですが情趣に溢れる旋律を持つのがボロディンだと思っています。交響詩「中央アジアの草原にて」作曲：1880年初演：1880年 ベテルブルク☆1880年、アレクサンドル2世即位25周年祝賀行事として企画された活人画の伴奏音楽として作曲。F.リストに献呈。原題は音画「中央アジアにて」(引用:クラシック音楽作品名辞典/三省堂)※各アルバムに張り付けてあるバラ飾りは"Oberholster VenitaによるPixabayからの画像"を使用させていただいてます。アンドレ・クリュイタンス指揮/フィルハーモニア管弦楽団 (1958年11月18-19日録音)アンドレ・クリュイタンス指揮/パリ音楽院管弦楽団 (1951年3月4日録音)エルネスト アンセルメ指揮/スイス・ロマンド管弦楽団 (1961年3月録音)最初にキーンと甲高い、どこまでも広がる草原の空気を感じる弦の響きはそれまで聴いたクラシック音楽とは異質のものに感じ、これと哀愁を帯びた美しい旋律とによって子供ながらもこの作品が焼き付けられました。アンセルメ盤がクッキリとした色彩で広い草原に一人旅のような孤独感を醸すのに対し、クリュイタンス盤は音画の世界、即ち雰囲気豊かに風景と風の匂いを描くように感じます。オーケストラの違う2つのクリュイタンス盤は、パリ音楽院管弦楽団とのモノラル盤が色彩のコントラストが強く、アンセルメ盤との雰囲気における共通点を感じさせ、共にフランス+ロシア的だと感じます。今度はフィルハーモニアo.との演奏と比べると、極端な話CBS時代とDGでのブーレーズの鮮烈な「春の祭典」の時のように響きが変わるように感じるものでした。ですからフィルハーモニアo.とのまろやかで雰囲気溢れる演奏の魅力は、丁度「E.T.」や「未知との遭遇」、「バック・トゥー・ザ・フューチャー」のような夢に溢れるものに感じたりするのです(特にホルンたちのふくよかな旋律が聴こえると)私的には、引き締まった空気感のアンセルメ盤(立体感のある録音と木管がとてもいい味出しています)、モノラルのクリュイタンス盤(パリ音楽院o.の音が素敵です)が心象としての「中央アジアの草原」だと思っています。それでも、心の日曜日をゆったりと寛ぐにはフィルハーモニアo.の雰囲気に浸りたいと思う、なんとも優柔不断な私が・・。そうそう、このブログからご近所付き合いが始まったご近所さん、今夜お電話いただいて「ヴァントのブルックナーのベルリン・フィルとのライヴ盤、あれから買った?」との事でした、私はケルン放送so.と北ドイツ放送so.盤を揃えているので後回しにしていたのです。「これからBOX持って行くからね」と物凄い貴重盤を頂きました。 4 ・ 5 ・ 7 ・ 8 ・ 9番が録音されていました。先ほどまで、それまでヴァントに感じていた第4番の素朴な崇高さにベルリン・フィルの威力がプラスされた魔力に腰を上げる事が出来ませんでした 関連記事 目次1 ロシア皇帝即位25周年のために作曲された2 ボロディン『中央アジアの草原にて』の名盤3 その他の曲目一覧（ 目次 ）『中央アジアの草原にて』はアレクサンドル・ボロディン（ Alexander Borodin/1833年- 1887年 ）が作曲した交響詩です。　ボロディンはロシア五人組の一人で、「 ダッタン人の踊り 」（ オペラ「イーゴリ公」より ）の作曲家としてもよく知られています。 また、音楽家としてだけではなく化学者として収入を得ていたことでも有名です。 ロシア皇帝即位25周年のために作曲された『中央アジアの草原にて』が作曲された1880年は、ロシア皇帝アレクサンドル2世の即位25周年の年でした。 それに伴いロシアでは各地で祝賀行事が開かれました。その中でロシア皇帝の事件を表現した活人画が予定されており、『中央アジアの草原にて』はそこで使われる音楽として作曲されました。　活人画とは役者や芸術家たちがポーズをとって絵画のような情景を作ることで、その間に役者は喋ったり動いたりしません。実際に活人画はおこなわれませんでしたが、作品はニコライ・リムスキー＝コルサコフの指揮の下でサンクトペテルブルクで1880年に初演されました。「 中央アジアの草原でのロシア人とアジア人 」を描く作品はタイトルの通り『中央アジアの草原』が舞台となっています。 音楽はアジア人のキャラバン一行が、ロシア人の兵士が見張る中で砂漠を歩いている様子を表現しています。まずはロシア風の音楽がその様子を表現し、そのあとにイングリッシュホルンがアジアの音楽を奏でます。 その砂漠地帯では馬やラクダがいるのですが、その蹄（ ひづめ ）の音をボロディンはピッツィカートで表現しました。 やがてアジア人の一行はロシア兵の付き添いの中、無事に砂漠を抜け出します。 そして曲の終わりではキャラバンたちは消え去っていき、ロシアのテーマだけが聞こえ終曲に向かいます。　ボロディンはオーケストラ用だけではなく、ピアノ連弾用の曲も残しています。ボロディン『中央アジアの草原にて』の名盤リムスキー＝コルサコフ: 交響組曲《シェエラザード》(SHM-CD)【収録作品】 1. リムスキー＝コルサコフ:交響組曲『シェエラザード』2. ボロディン:交響詩『中央アジアの草原にて』3. パラキレフ:イスラメイ(リャードフ編)【演奏】 ヴァイオリンソロ：セルゲイ・レヴィーチン(1) 管弦楽：マリインスキー歌劇場管弦楽団 指揮：ワレリー・ゲルギエフ 【録音】 2001年11月（ サンクト・ペテルブルク、マリインスキー歌劇場 ）録音のメインは『シェエラザード』ですが、カップリングも名演です。 ワレリー・ゲルギエフとマリインスキー歌劇場管弦楽団があうんの呼吸で、力強く色彩豊かな音楽を奏でています。 ゲルギエフは1988年にマリインスキー歌劇場の芸術監督に就任すると、1996年には総裁も兼任し、今に至っています。 その他の曲目一覧（ 目次 ）その他の作品・あらすじ・歌詞対訳などは下記リンクをクリックしてください。 ・クラシック作品（ 目次 ）・オペラ作品（ 目次 ）・ミュージカル作品（ 目次 ）・歌詞対訳（ 目次 ）・ピアノ無料楽譜（ 目次 ）【 記事の利用について 】 タイトルと記事文章は、記事のあるページにリンクを張っていただければ、無料で利用できます。 ※画像は、利用できませんのでご注意ください。 【 リンクついて 】 リンクフリーです。 2025年07月12日 今回は、ロシアの作曲家　ボロディンの「 中央アジアの草原にて 」をアップしいたので、紹介します。 「 中央アジアの草原にて（ In the Steppes of Central Asia ）」は、ロシアの作曲家アレクサンドル・ボロディンによって1880年に作曲された交響詩です。ロシア皇帝アレクサンドル2世の即位25周年を記念して、ロシアと東洋の友好・平和を象徴する目的で書かれました。 広大な草原を進むロシア兵と東方のキャラバン隊の様子が描かれ、ロシア民謡風の主題と東洋風の旋律が交互に、時には重なりながら展開されます。クラリネットやイングリッシュホルンが東洋の旋律を吹き、弦楽器が草原の静けさを表現します。 構成 約7〜8分の単一楽章で構成され、以下のような要素があります： 序奏：静かな弦の持続音が草原の広がりを表す ロシア主題：クラリネットなどがロシア風旋律を提示 東洋主題：イングリッシュホルンや木管が東洋風の旋律を奏でる 両主題の融合：二つの文化が調和するように重ねられる 終結：再び静寂に包まれ、曲は穏やかに終わる 作曲者：アレクサンドル・ボロディン 生年：1833年11月12日 没年：1887年2月27日 国籍：ロシア帝国 職業：作曲家、化学者、医師 作風 ボロディンは「 ロシア五人組 」の一人であり、民族色を重視した作風が特徴です。西洋音楽の形式にロシア民謡や東洋的要素を融合させる手法で知られます。また、交響詩や交響曲において優れた管弦楽法を見せました。 代表的作品 交響詩《中央アジアの草原にて》 交響曲第2番 ロ短調 歌劇《イーゴリ公》（ 「ダッタン人の踊り」が有名 ） 弦楽四重奏曲第2番（ 「夜想曲」が特に知られる ） ウクライナ対ロシアの戦争が終わるまで、掲載を続けていきたいと思います。平和への祈り「鳥の歌」「私の生まれ故郷カタルーニャの鳥は peace、peace と鳴くのです」（ カザルス ）ウクライナ民謡news！期限切れによるリンク切れには、ご容赦【有料記事】は、記事の一部が無料、全部読もうとすると購読契約などが必要です。ユーザーIDなどの登録は個人の責任でお願いします。AFP：信用できない広告があります。特に「続く」「次に」「開く」といったボタンに注意してくださいロシア大統領府、解任された前運輸相の自殺に「衝撃」 議会では誰一人触れずNHKCNN カッポコ！カッポコ！ 進むよキャバン 悠々と…♫ www.youtube.com 見渡す限りの広大な中央アジアの草原にて… 進む… 進む… 進む… さて、今回は、 そんな草原をゆく隊商（ キャラバン ）の様子を色鮮やかに描ききった《中央アジアの草原にて》の解説とおすすめ名盤を紹介です。 【ここをクリックすると名盤の解説へ飛びます】 【楽曲を解説】ボロディン《中央アジアの草原にて》 ボロディン《中央アジアの草原にて》についてのこんな解説があります。 「 中央アジアの単調な砂漠の静けさのなかで、最初に平和そのもののロシアの歌がきこえてくる。遠くから、馬とらくだが近づいてくるのがきこえてきて、東洋風のさびしげな旋律もきこえてくる。隊商が果てしない草原から浮かびあがってきて、ロシアの軍隊に守られながら、安全に心配もなく、征服者の巨大な軍力に支えられてその長い旅をつづけている。それは、ゆっくりと消えてゆく、征服者と被征服者の静かな歌が調和して融合し、そのひびきは、隊商のように遠くに消えてゆく。」 出典：門馬直美 著 「管弦楽・協奏曲名曲名盤100」P66より引用 以上の解説の内容は《中央アジアの草原にて》の初演の際のプログラムに「表題」として書かれたものだとのことです。 冒頭からロシアをイメージしたメロディをヴァイオリンの高音が奏でながら、そこにクラリネットの静かな歌が重なってきます。 カッポコ、 カッポコ、 カッポコ、 進みゆく隊商（ キャラバン ）が近づいてくるイメージが弦楽器のピチカートで表現されています。 すると、そこへ聴こえてくるのは東洋を表したイングリッシュホルンの歌。 この後「ロシアのメロディ」と「東洋のメロディ」が会話を交わしながら次第に盛り上がっていきます。 はるか遠くの蜃気楼の中から、 と隊商（ キャラバン ）が表れ、近づいてくる印象です。 そして目の前を行き過ぎ…そして、さらなる蜃気楼の彼方へと と、去ってゆき、ゆらりゆらめく蜃気楼の中へと消えこんでゆく…。 そんな、なんとも言えないオリエンタルな魅力を持った そういったものを、鮮やかに描いた名曲として仕上がっていますね。 【作曲の経緯】ボロディン《中央アジアの草原にて》 《中央アジアの草原にて》は、1880年、ロシアのアレクサンドル2世の皇帝即位25周年の祝賀行事のために作曲されました。 この中で活人画（ 作られた背景の前で役者たちが無言でポーズを取り、まるで絵のような情景をつくったもの ）を盛り上げるための言わばBGMとしての依頼です。 実際の祝賀行事では活人画自体は行われなかったようですが《中央アジアの草原にて》は1880年4月8日にリムスキー・コルサコフの指揮によって初演が行われています。 【名盤2選の感想と解説】ボロディン《中央アジアの草原にて》　エルネスト・アンセルメ：指揮　スイス・ロマンド管弦楽団　アルパカのおすすめ度★★★★★ 【名盤の解説】 まるで絵画のような色鮮やかな描写が魅力のアンセルメの名盤。 広大な中央アジアの草原を馬とラクダがそれこそ というヒズメの音とともに、悠々とその歩を進めてゆく光景が目に浮かぶようです。 蜃気楼の作り出す景色の見事なグラデーションの美しさ…。 乾いた風…。 深いシワが刻まれた黒く焼けた肌の隊商の隊員たち…。 そんな光景を音楽を通して聴きたいならコチラの名盤ですね。 ワレリー・ゲルギエフ：指揮　マリインスキー劇場管弦楽団　アルパカのおすすめ度★★★★★ 【名盤の解説】 「感性的なフレッシュさと美しさ」でいっぱいのボロディン《中央アジアの草原にて》ですね。 温かみを含んだ情の深みが感じられて親しみが持てますしアンサンブルも精緻で透明感があっていいですね。 さあ、ボロディン《中央アジアの草原にて》をボリュームを落とし気味にしてリピートしましょう。 そしてゆったりとした時間を取って、一日の心の疲れを取り払いたい。 そんな時に聴きたい名盤です。 【まとめ】ボロディン《中央アジアの草原にて》 さて、ボロディン《中央アジアの草原にて》の解説とおすすめ名盤はいかがでしたか？ 中央アジアの単調な砂漠の静けさ 平和そのもののロシアの歌 東洋風のさびしげな旋律 ゆったり、隊商やってくる 珍しがってる子どもたち それまで遊んだ子どもたち 全部忘れて駆け出して… 隊商は目の前、通り過ぎ… カッポコ、カッポコ…ヒズメの音と、 ガッシャン、ガッシャン…物音と、 ザクザク、ザクザク…足音と…、 そして、遠くの蜃気楼… かすみの中へと消えてゆく… 遠く遠くの果てしない 大きな草原、消えてゆく う～ん、日本では中々見ることの出来ない光景ですね。 せめて音楽、聴きながら…。 そう、ボロディン《中央アジアの草原にて》を聴きながら… ゆったりと壮大な、中央アジアの大草原を楽しみましょ…。。。 そんなわけで…『ひとつの曲で、 たくさんな、楽しみが満喫できる。 それが、クラシック音楽の、醍醐味ですよね。』今回は、以上になります。 最後までお読みいただき、ありがとうございました。 関連記事↓ 情景が浮かぶ名曲なら…こんな曲もいいですね…♫ www.alpacablog.jp www.alpacablog.jp www.alpacablog.jp

- https://www.studiopicotti.com/_admin/kcfinder/upload/files/48136513857.pdf
- https://kinghuat.com/uploads/editor/files/31091645584.pdf
- https://aptitudeclass.com/ckfinder/userfiles/files/f695e8f5-9907-4c9d-babf-526995200b19.pdf
- http://dwitunggaljaya.com/sitefiles/file/90083661637.pdf
- basics of drawing for beginners pdf
- wellness check quotes
- mayeduve
- https://heritagecambodiatravel.com/userfiles/file/86844428679.pdf
- http://chi-kara.net/Upload/files/3bb44777-58b8-40d7-aeab-5e40d8bdd42f.pdf
- what athens has to do with jerusalem